

翻 訳

## 発達文脈主義

—新たな発達論的システム理論の一例—

### Developmental Contextualism:

An Instance of Development System Theories

張文新 陳光輝著 (山東師範大学)

上野正道 キム・ウリハン 任潔訳 (大東文化大学)

ZHANG Wen-Xin, CHEN Guang-Hui

(School of Psychology, Shandong Normal University, Jinan 250014, China)

Translated by UENO Masamichi, JIN Wurihan, REN Jie

(Daito Bunka University, Tokyo, Japan)

Key words : 文脈, 蓋然的後成説, 循環作用研究, 可塑性, 適合度モデル

context; probabilistic epigenesis; circular effects research; plasticity;  
the goodness-of-fit model

**Abstract:** Developmental Contextualism, as an instance of developmental system theories, represents a new and increasingly influential theoretical perspective on human development. The central idea of Developmental Contextualism lies in that changing, reciprocal relations (or dynamic interactions) between individuals and the multiple contexts within which they live comprise the essential process of human development, and that the goodness-of-fit of between the person and the context can foster the positive development of individual. In contrast with the notion of predetermined epigenesis as reflected in many stage theories of human development, theorists of

Developmental Contextualism admit greater plasticity in development and believe that developmental changes are probabilistic in respect to normative outcome due to variations in the timing of biological, psychological, and social factors (or levels) that provide integrative base of ontogenetic progression. The circular effects research—a new research approach—has been proposed by Developmental Contextualism to investigate the circulate functions in development.

発達心理学の理論は、心理学の理論システムの重要な部分である。科学的な事実の蓄積と心理学理論の発展にしたがって、発達心理学研究者は、単一要因が人間の発達過程に影響するということの限界を認識し、系統的要因（環境、遺伝、個人自身の要因）における総合的な影響作用に注目するようになった（Witherington, 2007; Sorell, SoRelle-Miner, & Pausé, 2007; Greenberg, Partridge, Mosack, & Lambdin, 2006）。1980年代にアメリカの有名な心理学者でタフツ大学教授のR. Lernerは、既存の理論（ダイナミックシステム理論、人-環境全体相互作用論、生態学理論など）にもとづいて、発達文脈

\*本稿は、張文新 陳光輝〈发展情境论——一种新的发展系统理论〉《心理科学进展》, 2009, Vol.17, No.4, pp.736-744の翻訳である。本研究は、中国の国家自然科学基金(30570612)全国教育科学「第十一次五か年計画」教育部革新課題(DBA07073)、山東省泰山学者工程と山東省「第十一次五か年計画」強化的建設の核心学科支援項目の研究成果である。著者の張文新氏は山東師範大学副学長兼心理学院教授、陳光輝氏は山東師範大学心理学院講師である。訳者の上野正道は、山東師範大学心理学院客員教授、基礎教育集団学術顧問を務めている。

主義を提起した (Muuss, 1996)。発達文脈主義は、機械環境モデルや生物成熟モデルといった伝統的発達理論に見られる、単一要因が人間の発達に必然的に影響するという考えに反対し、系統的要因が個人の発達に偶然的な影響を与えることを強調した。また、この理論は、発達途中の個体と生活の生態環境が時間とともに相互作用を発生させることを強調した。既存の理論と比較して、発達文脈主義は、人間の発達過程の本質的な特徴をよりよく説明できるし、敏感性と総括性を備えてもいる。この理論は、人間の発達法則を深く研究し、予防と干渉のための指導的な理論を提供した。

## 1. 発達文脈主義の理論的淵源

「変化」(change) は、発達文脈主義の基本的な思想に内包される。発達文脈主義のすべての理論観点は変化の上に形成されている。実際、この哲学観点は、発達文脈主義によって開始されたのではなく、古代ギリシャの哲学者Heraclitusによって提起されたものである。Heraclitusは、世の中に「変化」しか永遠に存在するものはないと考えた。「文脈主義」の概念は、シンボリック相互作用論とシステム哲学と同時に形成された。それはまた、発達の哲学として生み出された。Pepper (1942) が「言語仮説」の中で述べたように、人間の行動と社会、文化と歴史状況がつながることによって意味を持つのである。

現代の心理学理論では、「文脈」(context) の意味が改善されている。行動主義者は、発達の文脈を外界からの刺激反応だけで定義づける。社会的学習理論は、環境の要因を重視する (谷伝華, 张文新, 2003)。現象学にもとづいて形成された形態心理学によれば、「文脈」というのは主に一つの心理的環境であり、その内容は個体が環境に与える主観的意味のことである。Lewinの議論が形態心理学を継承し、「文脈」の意味を豊かなものにした。Lewinは、「文脈」を不確定な心理フィールドあるいは生活空間だと考える (叶浩生, 1998)。以上によれば、人間は、発達文脈に対して、機械化から生物化を経て、人間化に至る理解のプロセスをたどってきたことがわかる。研究者は、具体的で心理学的な要因を重視するようになった (Witherington, 2007)。

科学は、発展過程で一つの理論の刺激によって反対の理論が生み出される。二つの理論の矛盾によって、新たな総合的理論が生み出される。たとえば、Gesellが「成熟行動論 (The Theory of maturation potency)」を提起した後、それとは対立する行動主義理論が誕生した。そ

の後、相互作用論が両者の矛盾を緩和させた。発達文脈主義も、既存の理論を利用して、不足点を改善した上で形成された。Lerner (2002) は、発達文脈主義が機械論と有機体論の折衷の産物だと考えている。発達文脈主義は、機械論の影響のもと、発達過程に影響を与える外部性、環境性、実験変量を吸収した。また、有機体論の影響で、発達系統の変化を説明する生物性と内因性原則を融合させた。発達心理学者は、発達文脈主義によって、遺伝と環境、初期経験と後期発達、認知-意欲及び行動と個体発達と社会発達についての論議と対立を融和させた。

発達文脈主義は、三つの直接的な基盤によって形成された。第一は、比較心理学 (Comparative Psychology) である。比較心理学者は、個体の生物変化が心理的環境によって発生し、一方の成熟論 (Unidirectional maturation) に反対する。比較心理学者は、発達が生物要因、心理要因、社会化過程の間の相互作用の結果だと主張する。第二は、人間生涯発達論 (The life-span view of Human Development) である。この理論の研究対象は、個体の生涯の発達である。この理論は、「人間が発達の潜在能力を生涯にわたって持つ」と考える。青年期は、人間の発達の終わりなのではなく、生涯の中で変化し続ける一つの段階であると主張する。最後に、生態システム理論 (The Ecological System Theory) である。Bronfenbrennerら (1979) は、発達途中の個体と環境の各種システム (マイクロシステム、中間システム、マクロシステム) の関係が相互作用の関係であると強調する。このように、発達文脈主義は、既存の理論を利用して廃棄することによってその理論システムを洗練させていった。

## 2. 発達文脈主義の主要な理論的観点

### 2.1 文脈の意味

文脈は、発達文脈主義の核心概念であり、個人の発達に影響する各種変数で構成された相互作用システムである。発達文脈主義の中の文脈が意味するものは、一般に使用される背景 (setting)、周辺環境 (surrounding)、環境 (milieu)、あるいは自然と社会環境 (environment) といった用語が意味するものを超えたものである。実際、文脈は、以下の四つの意味を含んでいる。第一は、物理的環境 (physical setting, environment or milieu) である。物理的環境は、文脈の一つの部分として、具体的には、家庭の地理的な位置、部屋、家具、学校の建築、教室、事務室、掲示板、教会のコミュニティ、レク

リエーション施設などを含んでいる。第二に、社会構成員 (social components) である。文脈主義の社会構成員の中には、家族構成員、同伴者、教師、デートの相手、他の重要な友達を含んでいる。それぞれの社会構成員は、個人の生活の一部である。彼らは、個人の発達に持続的な影響を与えると同時に、個人の発達からの影響も受けている。第三に、発達する個人 (developing person) である。発達する個人は、発達の目標だけではなく、発達文脈主義の一部である (Smetana, Campione Barr, & Daddis, 2004)。それぞれの個人は、社会環境の全体の一部であるだけでなく、他人の発達の重要な社会背景でもある。Lernerは、発達途中の個体の振る舞い、身体と外見及び言語の表現などが物理的環境、社会構成員の変化、個体と物理的環境、社会構成員の間の双方向性的相互作用の結果に影響を与えると考えた。最後に、時間の経過とともに文脈の変数も変化する (context variable change as a function of the progression of time)。すなわち、時間次元である。文脈変数は、個人の日々の成長や老化、環境施設の更新、学校教育の改革、新たな科学技術の出現、経済条件の変化など、時間の経過とともに変化するものである。これらの変数の変化がそれぞれの個人の発達状態にそれぞれの影響を与える。たとえば、両親の離婚は、学齢前の児童と青少年とは発達への影響が異なっている (张文新, 2002)。

以上によれば、発達文脈主義の文脈の意味は、環境科学の環境とは異なり、社会的個人と客観的環境の相互作用の結果であり、同時に個人は文脈の能動的構成者になった。この文脈は、個人の発達を促す即時的個人と環

境条件を含むと同時に、それぞれの個体の心理の構造及び個体のおかれた環境が時間とともに発生する変化をも含んでいる。それ以外に、この理論における文脈は、全体的で連続的で生態的で不確定的な特徴をも備えている。

## 2.2 個人と文脈の動的相互作用

発達文脈主義と機械-行動主義心理学は、文脈に対する認識がまったく異なる。両者は、「文脈」が有機体に影響する外部存在だと考えるが、発達文脈主義と機械還元主義 (mechanic-reductionism) には違いがある。発達文脈主義は、有機体と文脈の間の相互作用が発達に対して影響することを強調し (Sameroff, 1975)、これらの相互作用モデルについての分析と解釈に精力を注いでいる。それ以外に、二つの理論における「有機体」の意味も大きな相違が存在する。発達文脈主義において、有機体は単純に環境の中の一つの純粋な機械的成分ではなく、反対にそれ自体一つの生活背景を備えた質的差異のレベルであり、持続的に他のレベルと動的相互作用を行うものである (図1)。

Lerner (2002) は、文脈及び有機体と文脈の関係の新たな認識にもとづいて、発達文脈主義の中に個人と個人のおかれた文脈の動的相互作用があるという考えを提出した。彼は、「成長」(maturation) によって有機体の内因的变化を示し、「経験」(experience) によって有機体の発達に影響する外部刺激を示した。動的相互作用観は、個人の発達が単純に成長の結果なのではなく、また純粋に環境や経験の影響の結果でもないと考えた。有機体の成長とこの経験の間には、動的相互作用関係が

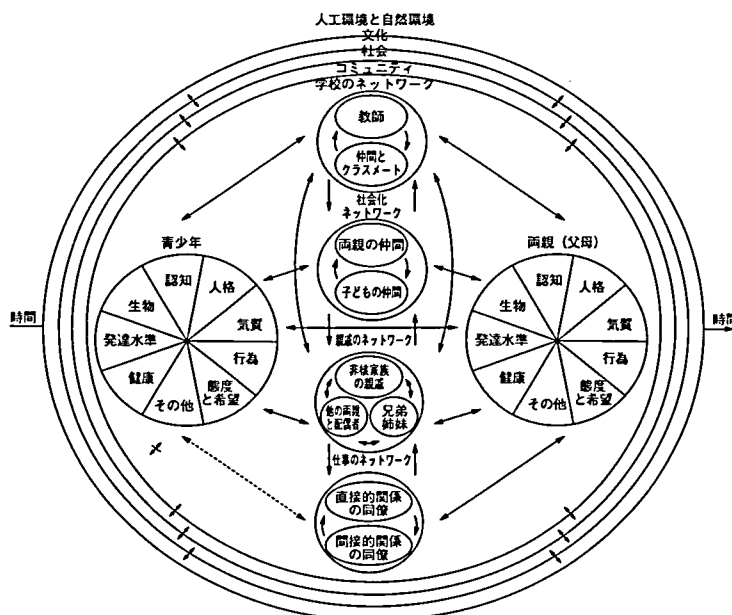


図1 人間の発達文脈主義理論のモデル (Lerner, 2002; Muuss, 1996)

ある。このほかに、彼は、個人の発達過程の中で有機体 (organism) の役割を示し、有機体が自身の成長と経験の間の相互作用の結果を蓄積するとともに、この発達の結果がある有機体とそれがおかれた環境との間で持続的な相互作用を進行させると考えた。一方で、有機体の成長と経験の間の相互作用の具体的なタイミング (timing) と性質は、有機体と環境の間の相互作用の差異に土台を提供し続ける。他方で、有機体と環境の相互作用からの差異的経験は、逆に個人の今後の成長と経験の間の相互作用の具体的時間と性質に影響を与える。内因的な成長と経験の間の相互作用と外因的な有機体と環境の間の相互作用は互いに進行し、連続的で絶え間ない関係を持つ。有機体とそれがおかれた文脈は、内因的な成長-経験の間の相互作用、及び有機体-環境の間の相互作用の連続的影響のもとで、持続的な発達を獲得するとともに、それぞれの有機体間の差異とそれぞれの文脈間の差異も持続的に変化する。

### 2.3 蓋然的後成説 (Probabilistic Epigenesis)

1970年代に、Gottlieb (1970, 2007) は、個人の発達過程の特徴について、既定的後成説 (Predetermined Epigenesis) と蓋然的後成説 (Probabilistic Epigenesis) という二つの相互対立的な思想観点を提出した。既定的後成説は、遺伝物が発達に一方的な方式で個人の発達を決定する作用があると主張する。たとえば、Eriksonによる人間の発達段階論は既定的後成説に属する。この理論は、生命体の内部の力量がすべての個人心理と行動を固定の発達順序に沿ってすべての発達過程の完成を駆使すると考えている。個人は、後成発達の過程の中に異なる心理的事件と相互作用を発生させる。言い換えれば、発達が個人に新たな経験の獲得をさせながら、新たな経験が個人の発達を促したり制限したりすると指摘した。

蓋然的後成説は、発達の段階論に明確に反対し、個人の発達があらかじめ不変的なものや予見可能な方式で実現するのではなく、蓋然的で可変的なものか、あるいは予見不可能な方式で実現すると考えている。「種の中で個人の行動の発達は、固定的あるいは必然的な時間過程に従うのではない。具体的に言えば、個人行動の発達の結果あるいは順序は、(普通のモデルに対して) 対外的なものであり、確定的なものではない (Gottlieb, 1970)。蓋然的構成説の理論的根拠は、発達する個人と文脈の間の相互作用であり、言い換えれば、発達は個人の生物機能とそれがおかれた文脈のそれぞれの水準の変数の絶え間ない相互作用の過程である」と考える。この過

程の中で個人の発達過程に相互作用の基盤を提供する生物的、心理的、社会的要因 (水準) は、時間の過程に個人の差異があるために、個人の発達が予定的 (必然的) な発達時間の過程と結果や、確定的な発達軌跡を持つということはない。このように、ある個人の発達の变化は、この年齢群体の一般発達の結果に対して蓋然的である (Schneirla, 1957)。それによって、蓋然的後成説は、人間の発達が一般的発達原則、発達段階、発達任務がなく、逆に個人の発達が方向と結果の両方に蓋然的特徴があると考えている。「成長は、想像以上に強い個性的過程であり、一般的な発達モデルを見出すことが難しい」 (Brim & Kagan, 1980)。「ある文脈の中の個人から得た結論が、他の文脈の中の個人に適用することはできない」 (Lerner & Miller, 1993)。

発達文脈主義は、蓋然的後成説が人間の発達の完成過程をより正確に解釈できると考え、さらにすべての社会環境、児童、青少年、その家庭に適用される一般的な発達特徴と機能の存在が不可能だと指摘した (Gottlieb, 2007)。一部の理論が提起した発達段階は、ある文脈の中にある人間の発達のスピードと発達性質にもとづいて作成されたものである。これは、単に人間の可能な発達の軌跡の一つの例であり、すべての個人に必ず適用される普遍的な発達の軌跡ではない。同時に、発達文脈主義は、多数の変数自身が安定的な質を持つことを否定しない。たとえば、気質、遺伝機構、身体外見、親子の相互モデル、放課後の経験、コミュニティと国家に発生した重大な事件、固定的、物理的な環境などである。これらの比較的安定した文脈変数は、個人の発達の蓋然的後成説 (Muuss, 1996) の範囲をある程度限定する。言い換えれば、発達過程は、全体的に蓋然的であり、限界もある。それは、どのような傾向性や潜在的可能性もなくすことのできない一種の変化過程である。このように、研究者は、具体的な研究を通して発達の蓋然的な程度を把握し確定する必要がある。それによって、個人の良好な発達が実現される。

### 2.4 個体の差異性と人間の多様性

発達文脈主義は、異なる個人が生物的、心理的、社会文化的水準において、差異が存在すると考える。このような差異は、個人と文脈の相互作用の差異も引き起こす。それから、個人間の差異と個人や文脈の相互作用の差異は、時間の進展とともに発達が異なる個人に異なる発達の軌跡をたどらせる (Lerner & Miller, 1993)。人間の発達の研究は、文脈変数の変化が個人と家庭にもた

らした差異性の影響にますます注目するようになっていく。それによって、人々は、個人の発達の差異を考えると同時に、もっと広い社会階層の発展の差異（人種差異、民族差異、性別差異、文化差異など）について考えはじめるようになった。たとえば、現在の世界では、文化的多様性がすでに人々の生活に影響を及ぼす重要な原因になっている。異なる文化は、人々が異なる信仰、感情、価値観を生み出すことに影響を与えるのみならず、人々の日常行為の方式に知らず知らずのうちに影響を与える（Yuk Yee Luk-Fong, 2005）。しかし、人間の発達条件と発達モデルにおける多様性は、長らく実証研究と理論的な思考によって見逃されてきた。欧米の研究者は、過去1世紀の間、白人のアングロサクソンの男性だけしか研究を行わなかった。彼らがその研究の中から作り出した知識と得た結論は、白人のアングロサクソンの男性というグループだけに限定されていた（Lerner, 2006）。

それでも、個人と個人の間はまったく同じでないということでもない。いくつかの類似的な文脈要因は、その要因のもとですべての個人がいくつかの共通性を持っている（Bostanci, 2006）。たとえば、同様の性別遺伝子を持っていることから男性個体とする。同じ宗教の国で暮らすことから同じ信仰を持つことになる。個人は異性が存在し、いくつかの共通性を持っているからこそ、人間の発達は支離滅裂なのではなく、多様な発達になる。人間が多様性を持っていることを十分に理解した上で、研究者は人間全体の一般的な発達モデルを推論するのではなく、研究を通して異なる群体として発達の特徴と発達システムを明らかにすることが必要となる（Witherington, 2007）。人間の異なる発達条件を深く理解するために、人間発達の差異性に注目することが必要である。異なる発達文脈において群体と個体を研究することではじめて、異なる発達現象と発達結果の背後にある具体的な影響要因と影響システムを明らかにすることができる。

## 2.5 適合度モデル (the Goodness-of-Fit Model)

適合度モデルは、発達文脈主義におけるもう一つの重要な観点である。要するに、適合度モデルは、人間のよい発達をどのように実現するのかを解釈するためのモデルかパラダイムの一種として用いられる（Lerner, 1983）。適合の対象は、個人の自身の特徴（気性、人格、価値観、態度、信念、技能と習性など）と個人がおかれる文脈（物理的、社会的な環境、重要な他者など）のことである。もし両者の間でよい適合度モデルを構築する

ことができれば、個人及び個人がおかれる文脈の発達を促進することができる。反対に、よい適合度モデルを構築することができなければ、発達が損なわれる。

適合度モデルの観点から見ると、個人がよい発達をできるかどうかは、個人の自身の特徴と個人がおかれる文脈の特徴によって決まるのではなく、個人と個人がおかれる文脈の間の適合度によって決まる。Ecclesら（1996）は、青少年のこれまでの発達レベルと彼らの学校環境の間でよく適合することが青少年の出世のきっかけと学業成果の発展を促進することができることを見出した。反対に、もし中等教育段階の社会環境と青少年の心理的なニーズの間でよく適合しなければ、青少年の動機、趣味、行為表現は、個体が中等教育に進むにしたがって悪化していった。学習障害のある生徒たちは、もっと悪化した。つまり、もし青少年の自身の特徴と彼らの文脈（家庭、学校、コミュニティ、親、兄弟姉妹、友達、仲間、教師、恋人など）の間でよく適合すれば、彼らはよい発達を得る。それらは、彼らのよい発達の結果を実現することに影響する（Furman, Jackson, Downey, & Shears, 2003）。このような適合関係は、ある二つの変数または特徴の間での因果関係を簡単に確定できないことを明らかにした。たとえば、両親の過酷な嫉妬は決まって青少年の攻撃的な行為をもたらしということである。両親の過酷な嫉妬のもとで、青少年は攻撃の行為をやるかどうかということについて、青少年の気性、思春期の状態、青少年のニーズ、両親の権威に対する態度など、側面の影響も同時に考える必要がある。つまり、適合度モデルは、ある二つの変数の間で構築される適合的モデルではなく、発達文脈主義にもとづいて構築された文脈的な適合的モデルである。

Lerner（2002）は、「個人は自身の生理、気持ち、行為特徴をある社会的な文脈に置く。それと同時に、社会的な文脈の中の社会と物理的な特徴は、社会的な文脈にいる個人に相応の要請をする」と指摘した。もし個人の自身の特徴が文脈によって提起された要請に合わせるか、ほぼ合わせるとするならば、この個人は自分がおかれる文脈の中でよく発達することができる。個人の特徴と文脈特徴の間の合わせる程度は、すべての発達過程の中で永遠に変化しないのではないと指摘されるべきだ。そして、両者は、あるタイミングに合わせる程度が次のタイミングに合わせる程度に影響を与える。つまり、個人のそれまでの発達結果は、これからの発達結果に影響し続ける。それにもかかわらず、個人は、すべての発達過程の中で、自分がおかれる文脈の固有の特徴に合わ

せるために、自身の特徴がまったく変化することもなければ、自身の特徴が終始変化しないということもない (Heckhausen, 1999)。

## 2.6 人間の可塑性

発達文脈主義の一つの前提仮説は、人間が可塑性と調整可能性を持っていることである。人間は、持続的な発達と変化の過程の中にある。さらに、絶えず文脈の出来事の影響を受けている (Lerner, 1984)。可塑性の理論的な観点は、進化論にもとづいて生み出された。進化論は、人間の進化の過程の中で、変異と調整の可能性がなければ、人間が生きていくことができないと考える。可塑性は、真に人間の発達を反映している属性の一種である (Bateson, et al., 2004)。人間は、文脈との相互作用の過程の中で変化する可能性がある。そして、このような発達変化は、蓋然的、後成的な方式で成し遂げられるものである。

心理学者は、かつて人間の人格、特質、行為の特徴が青少年期以後で次第に穏やかになり、顕著な発達変化がもう現れないと考えていた。多くの研究も、赤ちゃんは人間の発達の中で最も可塑性を持っていて、最も早いスピードで発達する時期であると示唆してきた (Blok, Fukkink, Gebhardt, & Leseman, 2005)。人間の可塑性は年齢が増すにつれて減少するけれども、人間の生涯の中でどのタイミングでも持っている可塑性の属性は変化することがない。人間が生涯にわたって持つ可塑性にもとづいて、研究者は、適切で厳密な教育と介入活動を通して個人の発達の変化に影響し、正常な個人が積極的な発達を得るようにし、異常な個人が早期に治療と介入を受けるようにさせる (Lerner, 2006)。そのうえで、個人は、生命の初期において比較的高い可塑性の特徴の啓示を持っていて、発達途中の問題に対しては早期に教育し介入するか、治療すべきである (Bateson, et al., 2004)。それと同時に、個人を積極的に発達させるという教育と介入の過程の中で、赤ちゃんと児童の親、兄弟姉妹、教師と仲間のような文脈的な変数を特に重視すべきである。

人間は可塑性を持っているけれども、それにも一定の限界があるのだろうか。つまり、人間の心理と行為はどの程度可塑的なのだろうか。進化論は、どのような種でも発達変化と発達モデルが自身の遺伝子の制限を受け、制限のない種というのはまったく存在しないと考える (Bateson, et al., 2004)。このような基本的な観点にもとづいて、発達文脈主義は、人間の遺伝子が人間と人

間がおかれる文脈の間の相互作用の程度を持続的に限定し、人間の発達の可塑性がこのような限定的な相互作用に耐える結果になると考える。したがって、人間の可塑性は無限ではない。人間の可塑性の限界あるいは調整可能な程度は、人間自身の遺伝子 (進化の結果)、及び人間と人間がおかれる文脈の具体的な相互作用とともに決定されるものである。

## 2.7 発達の調節

人間の発達がすでに蓋然性と可塑性を持っているとすれば、このような発達プロセスの調節はどのように実現するのだろうか。発達文脈主義は、発達している個人が発達の主体であり、発達のエネルギーであると考え。個人と発達文脈の間の相互作用の中で、個人は、自身の発達にしたがって以下の三点を正確に評価するようになる。(a) 個人の発達に対する具体的文脈の要請、(b) 自身の心理と行為特徴、(c) 両者の間の整合度である。さらに、個人は他の認知と行為の技能を持続的に発達させる (Lerner, 2002)。個人と文脈の間のよい適合を実現するために、個人は、意識的に自身の特徴に対してより高い整合度を持つ文脈を選択する。一方で、すでに確定した文脈要請を意図的に踏まえて、自身の特徴を調整する (Heckhausen, 1999)。この二つの方面は、個人の自身の発達過程の中で、発達のスピードと発達の質に対するコントロールを表している。

人間の発達は、能動的な過程であり、受動的な過程でもある。人間の発達は、持続的に遺伝子の制約と規定を受けるのみならず、個人のすべての発達過程の中で、親、教師、仲間、重要な他者からの影響も受ける。また、個人は、自身がおかれる家庭、学校、コミュニティ、社会環境を選択することがほとんどできない。この面からいうと、人間の発達は受動性の特徴がある。発達文脈主義は、個人と個人がおかれる文脈の間の相互作用を十分に強調している。しかし、文脈は、相互作用の一面として確実に個人の発達のプロセスに影響し続けている。幼い個人は、さまざまな技能において発達が未熟であったり、発達が欠陥であったりする。文脈要因としての家庭環境と両親などは、個人が積極的な発達を実現することを支援する過程の中で重要な役割を演じている。よくない発達をする年長の個人は、自身と自身がおかれる文脈の間のよくない適合関係を絶えず悪化させる。完備した学校教育と社会的なサポートシステムは、かなりの程度でこのようなよくない適合関係のモデルを変えることができる。それによって、将来の個人のよい発達を実現

することができる。文脈要因は、人間の発達過程に対して、持続的なコントロールの作用を発揮することを明らかにしている。要するに、人間の発達は可塑性を持っているのみならず、調節の可能性もある。これらは、人間のよりよい発達を実現し、よくない発達に介入するための前提を提供している。発達文脈主義の主要な創始者のLernerは、著作の中で、科学研究者と政府とともに、家庭、学校、コミュニティ、社会環境についての公共政策を策定すべきであり、個人と個人がおかれる文脈の間のよい適合を実現するために、基本的な保障を提供すべきだと提唱した (Muuss, 1996)。

### 3 発達文脈主義にもとづく研究傾向

発達心理学において過去の研究の事実と理論的概要は、ほとんど一方向性作用の研究にもとづいて獲得されてきた。発達文脈主義は、個人と文脈の間の二方向的な (bidirectional) 相互作用を強調し、それにもとづいて二方向性作用研究 (bidirectional effects research) と循環作用研究 (circular effects research) の研究傾向を次第に形成した。しかし、発達文脈主義は、個人と文脈の間の一方向的な影響作用の存在をまったく否定しない。このように、個人と文脈の間の一方向性作用研究、個人と文脈の間の二方向的な影響研究、及び個人と文脈の間の時間の推移に伴う相互影響 (循環作用) 研究の傾向は、すべて発達文脈主義が含む変数間の影響についての研究傾向を構成している。

#### 3.1 一方向性作用と二方向性作用の研究

一方向性作用研究 (unidirectional effect research) は、個人の文脈に対する影響、または文脈の個人に対する影響についての研究である (Witherington, 2007)。これは、これまでの研究の中で最もよく用いられた研究傾向である。心理学における多くの研究結果は、この研究傾向のもとで導き出された。一方向性作用研究は、二つの状況を含んでいる。(a) 個人の文脈に対する影響についての研究。個人の生理特徴、認知特徴、感情特徴、人格特徴、社会技能特徴などは、外界の物理環境と社会構成員の変化に異なるレベルの影響を与える。たとえば、攻撃的な個人というのは、公共の施設を壊したり、仲間に能動的に断られたりする (张文新, 2002)。(b) 文脈の個人に対する影響についての研究。異なる物理環境、文化環境、社会環境は、個人の発達に影響を与える。社会構成員の異なる特徴も、個人の発達に影響を与える。たとえば、親子関係が融和的な子どもの個人は、よりよく

人間関係を発達させる (张文新, 1999)。発達文脈主義は、これらの一方向性作用研究が発達の事実を真に指摘できないにもかかわらず、二方向性作用研究と循環作用研究を行うために、事実の根拠を提供すると考えている。その後、研究者は、発達文脈主義を基盤にして、より多くの二方向性作用研究と循環作用研究のもとで研究を実施している。

二方向性作用研究 (bidirectional effects research) は、個人と文脈の間の二方向の影響に対して行う研究である。つまり、個人が文脈に影響すると同時に、文脈からの影響を受ける (Lerner, 2002)。たとえば、Ladd (2006) は、攻撃行為に対する追跡研究によって、攻撃性の高い個人が概して比較的低い仲間の地位を占めて、比較的悪い仲間関係におかれ、また仲間に持続的に断られることで攻撃行為の現れや激化が招かれ、時間の推移とともに、攻撃行為と仲間に断られることが、たとえば、盗むというような外的な問題を引き起こすことを発見した。ここで言われる攻撃と仲間地位の間の作用関係、及び両者と他の外的な問題行為の間の作用関係は、一方向性作用研究では完成することができない。したがって、二方向性作用研究は、個人の発達と影響要因の間の二方向性作用関係を明らかにするのに都合がよい。それでも、実際の発達過程の中で、個人は同時に多くの要因に影響を与え、そしてこのような影響関係が時間とともに持続的に変化する。発達文脈主義は、以上の二つの研究傾向では個人の発達の特徴を明らかにすることができないと考える。したがって、循環作用研究の傾向が提起された。

#### 3.2 循環作用研究

循環作用研究 (circular effects research) は、二方向性研究を基礎に時間の次元数を加えた研究傾向であり、一種の縦方向の相互影響研究である (Sorell, SoRelle-Miner, & Pausé, 2007; Miss, 1996)。個人の発達過程の中で、時間の推移にしたがって、個人と文脈の間の相互影響に変化が生じるし、また相互作用の異なる開始時間と条件は、個人が異なる発達の軌跡をたどり、異なる発達結果を生み出す。循環作用研究は、時間とともに生じた相互影響の特徴と作用の潜在的なシステムをよく提示することができる。また、研究の過程で焦点を合わせた介入を実施することができる。

Lerner (2006) は、ある文脈と個人の循環研究を通して、児童が学校にいる時のよくない表現が児童自身の気持ち、態度、家にいる時の行為、親子関係の質に影響を与え、両親が児童の気持ち、態度、行為からの影響を

受けると、児童の探索、競争、社会的技能を発達させる機会を制限するということが証明した。同様に、児童は家でよくない待遇を受けると、彼らが学校にいる時のよくない表現をより悪化させる。学校は両親に児童が学校にいる時のよくない表現を報告した後、両親に怒らせる。それによって、両親は、児童の行為をもっと厳しく制限する。このような研究設計は、発達の真の過程により即したものである。そして、個人の発達結果も、このような異なる要因の間の循環的な作用を果たすことになる。さらに、循環作用研究は、異なるタイミングか異なる時間帯で、同じ要因が時間とともに個人に対して生み出した異なる影響の作用にも注目する。たとえば、Schoonra (2002) の研究は、社会の中で経済的な地位に関する危険要因が個人の発達の影響に対する個人の発達の段階次第であって、児童と青少年という段階にいる個人が受けたよくない影響が最も大きいことを明らかにする。個人の発達と文脈の間の相互影響は、時間の移り変わりにしたがってますます穏やかになり、個人の発達を持続的に促進するか妨害する。発達文脈主義は、このような多くの種類の研究にもとづいて、個人と個人がおかれる文脈の間のよい適合度モデルの構築と調整を通して、よい循環的な影響関係を実現し、反対にこのようなよい適合度モデルの構築と調整は縦方向的な循環研究によって提示された個人と個人がおかれる文脈の関わりの特徴と関係モデルに依存すると指摘する (Lerner, 2006)。

#### 4 発達文脈主義の実践的応用に対する示唆

発達文脈主義は、人間の発達が蓋然的な方式を通して次第に実現され、そのために具体的な発達文脈と群体に対する具体的な指導と助言を提供するか、適切な介入計画を実施すべきであると主張する。たとえば、発達文脈主義は、両親が個人に訓練、教育、コントロールを行う時に相互作用が生じる具体的な文脈を考えるべきであると強調する。発達文脈主義は、すべての個人に対する一般的な躰の手立てやアドバイスに反対する。そして、発達文脈主義は、ある重要な躰の状況に対する具体的な助言を提供する前に、具体的な文脈変数、たとえば年齢、性別、人種、今までの経験、自分概念、気性、個人の両親、教師との適応状況を考えるべきだと捉える (Muuss, 1996; Lerner, 2002; Lerner, 2006)。Bronfenbrenner (1979) の言う通り、問題行為の介入助言を提供する前に、個人と環境の間の相互作用の特徴を調べる必要がある。さらに、発達文脈主義も、人間の発達が差異性と多様性があると主張する。この観点は、発達の蓋然性の実

現方式により呼応することになる。人間は、発達の過程の中に差異性と多様性があるからこそ、個人と個人との発達モデルに差異が生まれるのであり、その発達の結果は多種多様な方向に発達可能な状態の一種にすぎないのである。これは、研究者が研究に対する異なる個人と個人がおかれる文脈の具体的な相互作用の特徴を提示することに力を尽くし、さらに明確な助言や介入計画を提供することが必要なことを示唆してきた。

これまでの発達理論は、人間の発達特徴と発達システムについてどのように科学的、全面的に解釈することに没頭し、人間の発達に介入することができるのか、またどのように介入するのかを看過してきた。発達文脈主義は、人間が可塑性を持っているという観点を強調し、人間の発達には介入や調整が行われると考える。発達文脈主義は、その論理的な前提にもとづいて人間の発達に対する介入や調整の考える道筋を提起する。つまり、個人と個人がおかれる文脈の適合度モデルの構築と調整を通して、個人の積極的な発達を実現する (Blok, Fukkink, Gebhardt, & Leseman, 2005)。それと同時に、発達文脈主義は、人間の可塑性が遺伝子といくつかの固定された後天的な環境に制限を受け、また可塑性の程度が年齢の増加にしたがって、次第に低下すると認識した。この観点は、心理学関係者が異常な行為をする個人や苦境にある個人に対して早めに介入や調整を行う必要があり、またいくら可塑性の程度が高い介入タイミングを逃したからといっても、いくつかの異常な行為がある個人に対する治療と介入を諦めてはいけないことを示唆している。文脈は、同様に可塑性があり、文脈と相互作用を行う個人が作られると同時に、自分自身がおかれる文脈を絶えず作っている。したがって、研究者は、個人と個人がおかれる文脈の適合度モデルを研究し構築するとき、個人がおかれる文脈に馴染むために個人を作ることだけに着目してはならず、それと同時に、個人の発達のニーズにより整合するために文脈を作る必要がある。総じて言えば、発達文脈主義は、研究者自身が個人と社会発展の文脈変数であり、彼らが科学的研究、公共政策の策定と実施への参画、指導や具体的な介入と治療計画の実施を通して、個人と個人がおかれる文脈のよい適合を促すと考える (Miss, 1996; Lerner, 2006)。

どのような理論でも避けがたい問題は、偏ったところが常に存在しているということである。研究者は、19世紀にドイツの「純粹」な学術傾向の影響のもとで具体的な文脈を乗り越えた後、「純粹性」の知識(たとえば、一般的な法則、原理、システムなど)を求めること



に力を尽くし、またそれら既存の文化的文脈と関係がない知識ほど研究の価値があると考えている (Fisher, Fabricant, & Simmons, 2004)。しかし、発達文脈主義は、人間と人間がおかれる文脈の蓋然性、即時性の発達、人間と人間がおかれる文脈のよい動態的適合を強調する。発達文脈主義は、人間と人間がおかれる文脈の蓋然性の発達特徴を過度に強調し、また人間の発達過程の中の一般的特徴と段階的特徴に明確に反対する。この二種類の研究傾向は、明らかに鋭く対立するものである。このような非折衷的な理論観点であるからこそ、発達文脈主義は、現在の心理学の研究に対して、より直接的な指導価値があるかもしれない。これは、いわゆる角を矯めて牛を殺すということである。将来の理論家は、この論争を止揚することによって、新たな理論を構築するだろう。しかし、これは、発達文脈主義が持っている価値を完全に抹殺することにはならないのである。

## 参考文献

- 谷传华, 张文新. (2003). 情境心理学内涵探微. 山东师范大学学报 (人文社会科学版), 5, 99-102.
- 叶浩生. (1998). 西方心理学的历史与体系. 北京: 人民教育出版社.
- 张文新. (1999). 儿童社会性发展. 北京: 北京师范大学出版社.
- 张文新. (2002). 青少年发展心理学. 济南: 山东人民出版社.
- Bateson, P., Barker, D., Clutton-Brock, T., Deb, D., D'Udine, B., Foley, R. A., et al. (2004). Developmental plasticity and human health. *Nature*, 430, 419-421.
- Blok, H., Fukkink, R., Gebhardt, E., & Leseman, P. (2005). The relevance of delivery mode and other programme characteristics for the effectiveness of early childhood intervention. *International Journal of Behavioral Development*, 1, 35-47.
- Bostanci, A. (2006). Two drafts, one genome? Human diversity and human genome research. *Science as Culture*, 3, 183-198.
- Brim, O. G. Jr., & Kagan, J. (1980). Constancy and change. In O. G. Brim, Jr., & J. Kagan (Eds.), *Constancy and change in human development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bronfenbrenner, U. (1979). *The ecology of human development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Eccles, J. S., & Lord, S., & Buchanan, C. M. (1996). School transitions in early adolescence: What are we doing to our young people? In J. A., Graber, J. Brooks-Gunn, & A. C. Petersen (Eds.), *Transitions through adolescence* (pp. 251-284). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Fisher, R., Fabricant, M., & Simmons, L. (2004). Understanding contemporary university-community connections: Context, practice, and challenges. *Journal of Community Practice*, 12, 13-34.
- Furman, R., Jackson, R. L., Downey, E. P., & Shears, J. (2003). Social constructivist practice with youth. *Child & Adolescent Social Work Journal*, 4, 263-275.
- Gottlieb, G. (1970). Conceptions of prenatal behavior. In L. R. Aronson, E. Tobach, D. S. Lehrman, & J. S. Rosenblatt (Eds.), *Development and evolution of behavior* (pp. 111-137). San Francisco: Freeman.
- Gottlieb, G. (2007). Probabilistic epigenesis. *Developmental Science*, 1, 1-11.
- Greenberg, G., Partridge, T., Mosack, V., & Lambdin, C. (2006). Psychology is a developmental science. *International Journal of Comparative Psychology*, 2, 185-205.
- Heckhausen, J. (1999). *Developmental regulation in adulthood: Age-normative and sociocultural constraints as adaptive challenges*. New York: Cambridge University Press.
- Ladd, G. W. (2006). Peer rejection, aggressive or withdrawn behavior, and psychological maladjustment from ages 5 to 12: An examination of four predictive models. *Child Development*, 77, 822-846.
- Lerner, R. M. (1983). A "goodness of fit" model of person-context interaction. In D. Magnusson & V. L. Allen (Eds.), *Human development: An Interactional Perspective*. New York: Academic Press.
- Lerner, R. M. (1984). *On the nature of human plasticity*. New York: Cambridge University Press.
- Lerner, R. M., & Miller, J. R. (1993). Integrating human development research and intervention for America's children: The Michigan State University Model. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 14, 347-364.
- Lerner, R. M. (2002). *Concepts and theories of human development (3rd ed)*. London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Lerner, R. M. (2006). Developmental science, developmental systems, and contemporary theories of human development. In W. Damon & R. M. Lerner (editors-

- in-chief) and R. M. Lerner (vol. ed.), *Handbook of child psychology. Vol. 1: Theoretical models of human development* (6th ed., pp. 1-17, 43-61, 542-548). Hoboken, NJ: Wiley.
- Muuss, R. E. (1996). *Theories of adolescence (sixth edition)*. New York: The McGraw-Hill Companies, Inc.
- Pepper, S. C. (1942). *Word hypotheses*. Berkeley: University of California Press.
- Sameroff, A. (1975). Transactional models in early social relations. *Human Development, 18*, 65-79.
- Schneirla, T. C. (1957). The concept of development in comparative psychology. In D. B. Harris (Ed.), *The concept of development: An issue in the study of human behavior* (pp.78-108). Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Schoon, I., Bynner, J., Joshi, H., Parsons, S., Wiggins, R. D., & Sacker, A. (2002). The Influence of context, timing, and duration of risk experiences for the passage from childhood to midadulthood. *Child Development, 73*, 1486-1504.
- Smetana, J. G., Campione-Barr, N., & Daddis, C. (2004). Longitudinal development of family decision making: Defining healthy behavioral autonomy for middle-class African American adolescents. *Child Development, 75*, 1418-1434.
- Sorell, G. T., SoRelle-Miner, D. A., & Pausé, C. J. (2007). Moving on: The challenges of dynamic systems perspectives. *Human Development, 50*, 160-164.
- Witherington, D. C. (2007). The dynamic systems approach as metatheory for developmental psychology. *Human Development, 50*, 127-153.
- Yuk Yee Luk-Fong, P. (2005). Globalisation and localization enmeshed-towards a framework for the development of guidance curriculum in Hong Kong. *Globalisation, Societies & Education, 3*, 83-100.